

研究所だより

第 132 号

令和 4 年 3 月 22 日発行

可児市教育委員会

可児市教育研究所

可児市広見 1 丁目 5 番地

TEL(0574)63-4841

e-mail :kyoikukenkyu@city.kani.lg.jp

老いてもなおできることはある

可児市小中学校長会長（今渡南小学校長） 川原 淳一

週に三日ほど車を使わないで通勤しています。そんな生活が二年を過ぎました。

社会人になってからランニングをするようになったのはほんの 5 年前のことです。赴任した小規模中学校で駅伝選手と一緒に練習したことがきっかけです。2,000m のタイムトライアルでは生徒に 2 周以上差をつけられるものの、1 年後には自身の記録を 1 分 30 秒も短縮できました。走り始めた頃の自分に 1 周以上差をつけることができるようになったと思うと充実感、達成感は何ともいえず爽快なものでした。その当時は、駅伝練習のシーズンだけでなく、毎朝誰よりも早く通勤し、トラックを 10~20 周歩いたり走ったりすることが習慣となっていました。

しかし、現任校に異動してからはその習慣は途絶えてしまいました。腹囲がどんどん大きくなりついにはメタボの仲間入り。これではいけないと思い、年度の後半から車を使わないで通勤することを決意し、今日に至っています。片道 5 km の道のりを歩いています。冬季は体が温まるまでジョギングをしています。

続けたことで変わったことが三つあります。一つ目は、「距離に対する感覚が変わった」ことです。3 km 程度の用事なら車を使わないようになりました。二つ目は、「長い距離を走ることができるようになった」ことです。家から学校までの 5 km を走り通すことができるようになりました。三つ目は、「腹囲が戻った」ことです。今では 70 cm 台になり、自身の学生時代と変わらなくなりました。

また、最近では休日のウォーキングを楽しんでいます。これまでに各務原市、多治見市、関市、扶桑町、小牧市を複数回訪れましたが、その距離は 25~30 km ほどになります。びっくりされる方がいると思いますが、私もこんなに長い距離を歩くのは人生初です。しかし、やってみるとそんなに苦もなくできてしまうものです。「老いてもなおできることはある」、そんなことを感じながら、決してストックに陥ることなく、自らの意思で楽しむことができる何かをこれからも求めていきたいです。

立場上、子どもたちには、「夢や目標をもつこと」や「継続すること」の大切さを説く私たちがですが、そんな自分に夢や目標、継続して行っていることがあるのか、と問い続けてきました。

「評論家ではなく、実践者として子どもたちの前に立ち、人生の先輩として己の実践を語りながら互いの夢や目標に向かって、自分がやると決めたことを継続して行う」、そんな自分でありたいと思って勤務する日々が間もなく終わりを迎えます。最後までこのスタイルを貫いて、四月からの新しいステージに立ちたいと思っています。現在の体調は、ここ 10 年間でベストな状態だと感じています。これからも「老いてもなおできることはある」という気持ちで新しい生活をしようと思います。

「老いてもなおできることはある いわんや若者をや」 これからの岐阜県、可児市の学校教育を支える皆様のご活躍を祈念しています。

笑顔の“もと”を考える～笑顔の学校公表会より～

教育研究所 千葉 智治

令和3年度は、今渡北小学校と中部中学校が笑顔の学校公表会を行いました。

本来は、令和2年度に実施の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症のために令和3年度に延期となっていました。両校の先生方には、3年に及ぶ研究指定となりましたが、延長期間も精力的に取り組んでいただきました。また、今年度においても、市内の先生方の直接参観が叶わず、動画視聴による公表会となりました。公表校はもとより、参観する学校にも協力していただき、実施することができました。本当にありがとうございました。

ここでは、両校の公表会を改めて振り返るとともに「笑顔の“もと”」という視点で成果を考えます。

「今渡北小学校」の公表会から

今渡北小学校の発表は、学校の様々な活動の様子を紹介する動画と研究している国語の授業公開に関する動画で構成されていました。

学校紹介では、外国籍児童が多く在籍する学校の特色を生かし、特別支援教育を含めた多様性を大切にした教育活動を進めていることが分かりました。段階的な日本語教室の整備など、安心して学ぶことができるように環境が整えられています。また、「思いやりの心」を育てることに力を入れていました。道徳の学びはもちろんのこと、「心のあかり活動」や「さわやかあいさつ大作戦」などの児童会活動や伝統的な「交通安全レター作戦」は相手のことを考えた思いやりの心の育成につながっていました。

公開授業においてもICT機器を活用して、主体的な学びを生み出す工夫をすることで、ねばり強く考え、理解しようと最後まで学びを止めない児童の姿が見られました。そこには、仲間と共に学ぶ学校教育の良さが表れていました。

今渡北小学校が大切にしている「安全で安心できる」「仲間とのつながりで絆を深める」「勉強が

わかり感動を味わえる」学校の姿を目指し、「思いやりの心＝寛容性」を育て、「仲間(地域)との絆をつなぐ」ことを「笑顔の“もと”」として、日々の活動に取り組んでいることが感じられました。

「中部中学校」の公表会から

中部中学校では、学びの共同体の理念を実践のよりどころとし、「学び合う楽しさを味わう生徒の育成」を主題に掲げ、積み重ねてきた実践を発表しました。各学年で一教科ずつの授業公開は、どの学年においても仲間とのあたたかなかわりを大切に「学び合う」集団としての姿が具現化されていました。「分かれなさ」を率直に仲間へ伝え、それを受けて仲間と一緒に考え理解し合う姿が見られました。

生徒会活動においても「聴く、聴かれる学び合い」「静かな学び合い」「あいさつ活動」「日常生活でのかわり」など、仲間との関係づくりを重視した取り組みを展開していました。

5年間の研究実践において、継続して行われた取り組みの一つが「学年協議会」です。互いに授業を見合うことで、生徒を見取る力を高め、同僚性を育むことを目的に行われてきました。

中部中学校が大切にしている3つのキーワード「あたたかい かかわり」「願いをもつ・向かい合う」「学び合い」は、生徒の育成だけでなく、教師も共に成長し、かかわり合うことを目指しているのではないのでしょうか。

中部中学校の「笑顔の“もと”」は、生徒・教師、全員が主役の笑顔の学校をつくりあげるべく、心と心の交流を大切に日々取り組む中で培われていると感じました。

子どもたちの未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」を明らかにし、互いに学び合う「笑顔の学校公表会」でありたいと改めて感じた両校の発表でした。本当にありがとうございました。

今渡北小学校 公表会

令和3年度 可児市笑顔の学校公表会

可児市立今渡北小学校 公表会実践動画

令和3年10月28日

令和3年度 笑顔の学校公表会

今渡北小学校 笑顔の学校公表会

学校の教育目標
豊かな心を持ち
たくましく生きる子
元気・笑顔・感動
交通安全

渡邊 吾先生インタビュー「道徳の授業で大切にしていること」
学級みんなが話し合いに参加
本音を表出する振り返り

本校の見所
1. ICT機器を活用し、進んで仲間と学び深める姿
2. 自己の変容を自覚する振り返りの姿

3年生 国語科
「すがたをかえる大豆
食べ物のひみつを教えます」
授業者：前田 加代子 教諭

本時見られた素敵な姿

本授業の見所
1. ICT機器を活用し、進んで仲間と学び深める姿
2. 自己の変容を自覚する振り返りの姿

本時見られた素敵な姿

令和3年度 笑顔の学校公表会

可児市立今渡北小学校

今渡北小学校学校紹介：登場人物

吉村先生
山田先生
ベンジャミンさん

二瓶なつほ先生インタビュー「言語能力マップ活用について」
iPadサインの活用
役割を明確にした話し合い活動の充実

公表会次第
1. 始めの言葉
2. 学校紹介
3. 授業説明
4. 授業公開
5. 指導・助言
6. 終わりの言葉

本授業の見所
1. ICT機器を活用し、進んで仲間と学び深める姿
2. 自己の変容を自覚する振り返りの姿

本時見られた素敵な姿

本授業の見所
1. ICT機器を活用し、進んで仲間と学び深める姿
2. 自己の変容を自覚する振り返りの姿

本時見られた素敵な姿

「笑顔の学校公表会」構想(中部中学校)

可児市教育大綱

目指す方向

「子どもの心に寄り添い、個々の力を引き出し、伸ばす義務教育」を推進し、生涯にわたって学び、成長していく人材を育てます。

5つの目標

- 1 「豊かな心」を育みます
- 2 「共に生きるためのルールを守る意識」を高めます
- 3 「夢に向かってチャレンジできるたくましい力」を養います
- 4 「ふるさとを愛し、社会に進んで貢献できる人」を育てます
- 5 「子どもは地域全体で育てる意識」を高めます



笑顔の学校

学校の教育目標

考え 力を合わせて やり抜く

生徒の育成

【研究主題】

学び合う楽しさを味わう生徒の育成
～「聴き合う関係」「真正の学び」「ジャンプの課題」のある授業改善～

【研究仮説】

学習活動において互いに聴き合い、学び合う集団を育てる中で、「分かりたい」や「困り感」を表出させ、それを互いに共有して解決したり、互いの考えのよさを認め合ったりしながら追究することで、分かる喜びや学び合う楽しさを味わわせることができ、主題に迫る生徒の姿を育成することができる。

【研究内容】

- I. 「分かるようになりたい」「できるようになりたい」と願い、生徒が主体的に学ぶための手立て
- II. 協働的な学びを授業に取り入れ、生徒同士の対話的な学びを充実させるための手立て

【願う児童・生徒の姿】

豊かで充実した学級生活を基盤に、学び合う学習の中で、「分かるようになりたい」という願いや「分かなさ」を共有し、主体的・協働的に課題追究することで、学び合うことの楽しさを味わうことができる生徒

【生徒の実態】

- 「温かな学び」を求めて、生徒が主体的に学びに向かう姿が多くみられるようになってきた。
- ペアや4人グループによる学び合いが定着しつつあり、「分かなさ」を表出できるようになってきている。
- 「学び合い」を分かっている生徒が、分からない生徒に教えることだと勘違いをしている生徒もおり、学びにおいて上下関係が少し見られる。

【地域の実態】

- 学校行事やボランティア活動など、積極的に参加していただくことができる環境にある。
- 保護者の方も学校の教育方針におおむね理解を示して、協力的に活動に参加してもらっている。
- 多様な家庭環境があり、生徒の日常生活に影響が出る場合がある。

令和3年度 可児市学校所員会 研究実践報告

令和3年度 学校所員会の研究実践について紹介します。

1 学校所員の研究テーマ

「自ら考え、仲間と学び合い、表現する子の育成 ～協働学習の理念に基づいた授業づくりを通して～」

2 研究内容

新学習指導要領での授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現を佐藤学氏の提唱する「学びの共同体」での協働学習の理念に基づいた授業づくりを通して、①コロナ禍における「学び合い」を大切にした学習活動の在り方 ②創造的・挑戦的学びを引き出す「共有の課題」と「ジャンプの課題」の工夫について実践しました。

3 実践の状況

(1) 「協働的な学び」についての研修

① 6月8日 学校所員会

演題 「『協働学習』の進め方」

講師 倉知 雪春 先生

(愛知文教大学 学びの共同体スーパーバイザー)

② 8月18日 学校所員会

- ・各学校の協働学習の進め方の交流
- ・今後の研究実践について

(2) グループ別研究授業・授業研究会

○Aグループ 10月22日

旭小学校 授業者 遠藤 姫乃先生
社会「戦国の世から天下統一へ」

○Bグループ 11月18日

広見小学校 授業者 吉村 海人先生
社会「町人の文化と新しい学問」

○Cグループ 11月10日

中部中学校 授業者 柴田 順次先生
数学「反比例の意味」

他、実践報告者13名による実践

4 実践を終えて

新型コロナ感染症の拡大が心配される中でしたが、感染対策を十分に行い、3つのグループに分かれて授業研究会を実施することができました。また、所員の先生方におかれましては、自校にて「協働的な学び」について授業実践を行いました。

【成果】～所員の実践報告より抜粋～

コロナ禍での授業を想定し、向かい合わなくても、それぞれのタブレットを通して意見を交流できるように活動を仕組んだ。仲間のタブレットをのぞき込む児童や相手に体を向けて話す児童が現れた。また、自然と普段のグループ活動時に近い形になって話し合う班もみられた。

1単位時間に2回の協働学習を取り入れたことで、個人ではなかなか学習が進まなかった児童も、仲間の意見を聞いてワークシートに記入をしたり、進んで調べたりすることができるようになった。

【課題】

学習班での協働学習で、人の考えをただ書き写すだけの学習になっている児童がいた。また、学び合いではなく、単なる意見の発表会になってしまうことがあった。学習班での学び合いの手順や話型の提示、基本は自分で考えて、どうしても分からない時だけ仲間に聞く、などの「ルール」を明確にすることが大切である。

今年度は、タブレットを活用し、協働的な学びを深める実践が多くありました。タブレットの協働学習ツールを有効に使うことで、自分の意見の表出や仲間との意見交流が容易になり、協働学習の大きな助けになると感じました。

協働学習を積極的に取り入れることにより、教師対児童ではなく、児童と児童とのかかわりが増えます。そのためには、「分からなくても大丈夫。分からない時は、仲間に聴いてみよう。」という学級の雰囲気が必要になります。三密を避けることが要求される中ですが、「心と心は、いつも密」である学び合いを大切にしていきたいと考えています。

第37回教育実践研究助成事業教育実践論文候補者の概要

子どもの心に火をつけ「英語がわかる」「できる」といえる子を育てる英語授業を目指して

～ICT機器を活用し、言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する指導の在り方～

可児市立広見小学校 教諭 金田 ルツ紀

児童が「もっと英語で伝えたい」と思って主体的に英語の学習に取り組むためには、到達させたい児童の姿を具体的にイメージし、コミュニケーションの目的や場面、状況を明らかにした単元のゴールを設定することやその姿に迫るための指導過程の工夫が必要であると考えます。小学校では英語が教科化して2年目となるが、既習事項を活用し、授業が実際のコミュニケーションの場となるような授業をしていくことに不安を抱く教師も多くいるため、5・6年を系統的に見て単元のゴールを設定し基本となる授業案や教材を作成した。また、現場で課題となっている昨年度末から導入された ICT 機器の効果的な活用や、書く活動の段階的な位置づけ、ALTとの連携についても実践をした。これらの実践から、主体的にコミュニケーションに挑み続けることで言語活動を通して力を付け、高学年の94%が「英語がわかる」「できる」という実感をもつことができた。また、到達状況確認テストにおいて高い正答率を獲得でき、コミュニケーションを図る基礎となる能力を育成できた。

【講評】

英語科の授業において、中学校での実践に基づき、小学校から中学校の系統性に着目し、小中の児童生徒のアンケートや職員の意識調査から客観的な実態に基づいて実践をスタートしています。中1ギャップを生み出さず、「英語がわかる」「楽しい」と実感できるようにするために、①到達させたい具体的な姿のイメージ化と目指す姿にせまる指導過程の工夫 ②コミュニケーション能力の基礎を養う指導の工夫の、大きく2つの研究内容における具体的な諸手立てが、全てに有効に働いていました。特に、5、6年生の授業実践を通して、児童らの変容が顕著でよく分かり、論文を通しての説得力がありました。今後も、校内の中心とな

特別な「できた」「わかった」を味わえる授業づくり

～ 授業のユニバーサルデザインの視点から～

可児市立今渡北小学校 教諭 澤野 綾

本学級は在籍数 36 人。そのうち7人が外国籍児童である。さらに、学習がなかなか身につかない児童や突発的に行動してしまいなかなか授業に集中できない児童など、学習や生活で支援が必要な児童も少なからずいる。このような実態をふまえて、どの子も意欲的に授業に参加でき、「わかった」「できた」が味わえるようにするために、ユニバーサルデザインの3つの視点で授業改善を行った。3つの視点とは、授業のねらいをしぼった指導(焦点化)、できたことが味わえる指導(視覚化)、仲間と学び合う状況づくり(共有化)である。授業のねらいをしぼったことで、何を考えればよいのかということが明確になり、児童は意欲的に学習に取り組むことができるようになった。また、グループ学習を取り入れたことで、挙手発言が苦手な児童や集中が続かない児童も、自分の考えを伝えたり仲間の意見を聞いたりすることができた。授業改善をする前後を比較すると、仲間と共に前向きに国語の授業に取り組む児童が増え、その結果、授業が「わかる」と答える児童が増加した。

【講評】

学習や生活に困り感をもつ児童など、通常学級に在籍しながら個別の支援を必要とする児童を多く抱える中で、どの子にも「できた」「わかった」という学ぶ喜びを実感させたいという願いが強く伝わる実践でした。「ヒントカードを頼りにすれば自分で書ける」「振り返りシートの観点を大切にしたい」という小さな実感の積み重ねが、「国語の授業が分かる」という自信になり、これこそが国語力の土台になるものであると感じられました。特別支援学級の担任として勤めてこられたご経験を生かし、通常学級においても一人ひとりの学びに丁寧に寄り添おうとする指導姿勢が素晴らしいです。今後も、児童の学ぶ喜びを支える研究実

仲間と共に主体的に学ぶ生徒の育成

～ 「学び」をつなぎ、生徒をつなぎ、「学び」の自覚を生み出す指導 ～

可児市立西可児中学校 教諭 三品 達也

本研究の目的は仲間と共に主体的に学ぶ生徒の育成である。本実践では、OECD が教育を通して育成を目指す能力、学習指導要領における授業改善の視点に共通する「つなぐ」ことを重視した指導過程に注目する。本校生徒の主体的に課題を捉えられない弱さを克服し、仲間と協働的に学べる強さを活かすには、仲間と共に主体的に学ぶ生徒を育成する必要があると考えた。その手立てとして、研究内容Ⅰでは、課題及び発問を工夫することで、生徒が学習の目的や見通しを明確にもつことをねらった。研究内容Ⅱでは、場の設定、発問及び活動のつなぎ方を工夫することで、協働的な学びを通して課題を解決しようと粘り強く学習に取り組む姿を生み出すことをねらった。研究内容Ⅲでは、単元イメージ図の作成、評価方法・場面の工夫を実践した。単元イメージ図を作成し教師が「学び」の見通しをもつこと、評価方法・場면을工夫することで、生徒が自己の「学び」のよさや課題を自覚できると考えた。全国学力学習状況調査の結果、生徒の学習に取り組む姿から、本実践の効果を検証した。

【講評】

研究主題にかかわって「つなぐ」というキーワードをもとに今日的課題への取り組み方を具体的に示しています。また、生徒の実態と学校教育に求められていることを論拠として目指す生徒の姿を描き、具現化する手立てを工夫している点で説得力のある実践論文となっていました。西可児中学校の「つなぐ」取り組みは、単位時間、単元を通して「主体的な学びを継続させる」ことによる「対話的な学び」の効果を実証できていることに価値があります。全教科・領域を網羅的にとらえて職員に研究主題の理解を図り、実践に結び付く提案を粘り強く続けてきたことに敬意を表すとともに、今後さらに生徒一人一人が「つなぐ」質を高める経験を積み重ね、実社会・実生活において「活用できる力」となる研究

アイデアスケッチをもとに、自ら表現を高める生徒の育成

～ 自己の表現を生み出すための、俯瞰する「視点の提示」と「学び合い」を通して～

可児市立西可児中学校 教諭 波多野 優也

自らが表現したい思いや願いを生み出すこと、どのようにしたらその思いや願いを表現できるかと強く願って表現方法を工夫することが難しい生徒が多くいるという生徒の実態を踏まえて、作品制作の中でもアイデアスケッチに着目し、自ら表現を高める生徒の育成を目指し、俯瞰する「視点の提示」と「学び合い」を通して、今回の実践を行った。アイデアスケッチの段階で、表現を高めるための制作の視点を提示し、個人に対する指導の際においてもその制作の視点に着目させることで、生徒たちの思考が整理され数多くのアイデアが生み出された。また、学び合いを通して、お互いの作品に対するアドバイスをし合うことで、自分の表現の幅が広がることを実感した生徒が増えた。これらの実践を通して、制作の視点を常に考えながら自分の作品を俯瞰したり、学び合いを通して他者からの意見を自分の制作に取り入れたりすることで、制作意欲が高まり自らの表現を追求する生徒が多くなった。

【講評】

美術科における技能の定着にとどまらず、将来の生活に生きる豊かな心を養い、模倣に頼らず自分なりの策を生み出す思考力・表現力を育成したいという波多野先生の強い思いが伝わってくる実践でした。目的・機能を考えさせるための視点の提示と、意図的な学び合いの場の設定が、いずれも生徒の思考に寄り添ったものであり、主体的な学びに結びついていました。特に、対話的な学びにおいて思考を深めるための具体的な問いかけの提示は有効でした。苦手意識がどこから生まれるのか、実態把握と分析が的確で、生徒の変容につながる実践となっていました。これからも、生徒の思いに寄り添いながら、新たな時代に生きる思考力・判断力・表現力を育む授業づくりに継続的に取り組んで

令和3年度可児市教育実践論文応募のまとめ

<応募状況>

校種	職務別		年代別					性別			領域別 (論文数)														合計													
	教諭	合計	20代	30代	40代	50代	60代	合計	男性	女性	合計	教科											小計①	道徳		特別活動	総合学習	外国語活動	学級経営	生徒指導	特別支援	健康安全	管理経営	その他	小計②			
												国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図美	技家	保体	英語																	
小	16	16	10	4		2		16	8	8	16	3	2		1	1					1	1	9	3									1			2	7	16
中	10	10	6	4				10	7	3	10	1	1	1	1			1					6		1											3	4	10
計	26	26	16	8	0	2	0	26	15	11	26	4	3	1	2	1	0	1	0	1	2	15	3	1	0	1	0	0	1	0	0	5	11	26				

<優秀賞> 学番順

No.	学校名	氏名	領域	研究テーマ
1	東明小	教諭代表 大澤 久乃	その他	児童も職員も「笑顔の学校」を目指し、「学校課題解決」を目指した全校的な取り組み ～Q-U、学校生活・いじめアンケート等のアセスメントの結果をもとに校内外連携を生かして～
2	広見小	金田 ルツ紀	外国語	子どもの心に火をつけ「英語がわかる」「できる」といえる子を育てる英語授業を目指して ～ICT機器を活用し、言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する指導の在り方～
3	今渡北小	澤野 綾	国語科	「できた」「わかった」を味わえる授業づくり ～授業のユニバーサルデザインの視点から～
4	西可児中	波多野 優也	美術科	アイデアスケッチをもとに、自ら表現を高める生徒の育成 ～自己の表現を生み出すための、俯瞰する「視点の提示」と「学び合い」を通して～
5	西可児中	三品 達也	その他	仲間と共に主体的に学ぶ生徒の育成 ～「学び」をつなぎ、生徒をつなぎ、「学び」の自覚を生み出す指導～

<優良賞> 学番順

No.	学校名	氏名	領域	研究テーマ
1	帷子小	山越 葉奈	体育科	仲間と考えを広げ深め合い、確かな力をつける共同学習のあり方 ～「楽しい」「できた」と喜びを実感できる体育授業～
2	春里小	中島 紅音	生活科	地域の豊かな自然を活用し、自然に親しむ生活科学習 ～自分のよさを自覚し、意欲や自信をもって生活できる児童の育成をめざして～
3	今渡北小	渡邊 卓実	その他	コロナ禍での大規模校における校内研究の新たな推進方法の創造
4	中部中	中村 健太	理科	科学的な見方を用いて表現する生徒の育成 ～教材の工夫・思考・表現を育む指導の在り方～
5	中部中	更家 希	特別活動	自分と仲間の良さや変化に目を向け、認め合うことを通して自己実現をめざす生徒の育成 ～さまざまな学級活動の実践を通して～
6	西可児中	栗野 聖崇	その他	主体的に自己の力を発揮し、社会的自立を目指す生徒の育成 ～A生徒の2年間の歩み～
7	西可児中	加藤 佑弥	その他	主体的に学ぶ生徒の育成につながる効果的なICTの活用

<奨励賞> 学番順

No.	学校名	氏名	領域	研究テーマ
1	今渡南小	若尾真以	国語科	「読むこと」に対し意欲的に活動できる子の育成を目指して ～重要な言葉に着目した読み取りと自分の考えを豊かに表現する活動を通して～
2	土田小	長島ヒデキ	社会科	教材研究におけるICTの活用について ～若手教員の教材研究にかかる時間的負担の軽減と、児童の間接体験を通しての学びの価値について～
3	東明小	各務 吉貴	その他 自立活動	他者との中で児童が自分をコントロールするための指導実践
4	広見小	森 耀生	理科	理科の見方・考え方を意識的に働かせ、問題を科学的に解決するための資質能力の育成を目指して ～5年「ふりこのきまり」の学習を通して～
5	広見小	長屋 加奈子	道徳	よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う道徳科授業の在り方 ～自分事として考え、議論する道徳科授業を目指して～
6	広見小	改田 修	道徳	自分事として考え表現できる道徳授業の実践 ～「自分だったらどうするか」を主体的に考え、表現できる子を育てる授業づくり～
7	桜ヶ丘小	曾我 治寿	英語科	豊かな見方・考え方の育成をめざして ～違いを楽しみ、味わう児童の育成～
8	今渡北小	岩瀬 勇人	国語科	粘り強く考え、学習に取り組む児童の育成
9	今渡北小	遠藤 夢奈	社会科	コロナ禍での「社会科見学」の在り方について ～タブレットを活用した授業展開～
10	今渡北小	渡邊 優吾	道徳	本音を表出し、考え、議論する道徳科の授業づくり ～発問や振り返りを通して～
11	蘇南中	水野 祥子	国語科	言葉についての考えを深めようとする生徒の育成 ～比喩を使った文のよさを交流する活動を通して～
12	蘇南中	青井 考起	英語科	retellingを発信につなげる段階的な指導
13	蘇南中	加藤 耀	社会科	社会的な見方・考え方を広げる・深めることのできる生徒の育成 ～ICTを活用した指導の工夫～
14	東可児中	末次 美香	数学科	「分かった」「できた」を実感することができる教科指導 ～個人追究と協働学習を通して～